
failure fable ~ 目覚めの歌 ~

咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

failure fable 目覚めの歌

【Nコード】

N7871P

【作者名】

咲

【あらすじ】

神は目覚め、世界は動き出す。

序章（前書き）

序章

あれから、どれだけ時が経ったのだろう。

あの日、私は罪を犯しました。

私は、ただ見ていたのです。

——すべてを諦め、ただ見ていた。

あの子が苦しんでいるのに。

その原因は私にあるというのに。

その結果、あの子は罪を犯してしまった。

あの子に罪を負わせてしまったのは私。

それは、誰よりも罪深いはず。

だから…

私は罪を償うために城から…檻から出たのです。

いつ終わるか分からない、贖いの旅へと出たのです。

その『旅』が終えたとき、すべてを受け入れましょう。

——たとえすべてを失っても。

序章（後書き）

はじめまして咲と申します。今回、小説初挑戦です。

最初に書いておきますが、言い訳ですが……正直、小説を書くことに全く慣れていないので、至らぬところも多々ありますが、よろしく御願います。

夢の墓場

そこは何処にもない場所。

そして、誰もが辿り着ける場所。

だけど、誰も辿り着くことはできない場所。

彼は『そこ』を『星の泉』と呼ぶ。

彼の足下にある、底知れぬ泉が『星の泉』である。泉の水面^{みなも}近くに
は、幾つもの光が見えた。

——その光景は夜空を飾る星々のよう。

彼は水中に沈むことなく、水面の上に座り込んでいた。

水の中の星は消えてはまた、生まれていく。

ふと、彼は口元に淡い微笑を浮かべ、

「——終わらない夢か・・・」

言って、彼はゆっくりと立ち上がった。

「——幸せな夢・・・終わらない、見続けるしかない夢か・・・」

呟いて、彼は水面からもっとも遠い星を見つめた。彼、夢の神ヴィ
クは哀しげに微笑む。

「夢が終わるとき、それは罪が消えたとき。それはいつ?・・・も
う罪は消えたはずなのに。彼女が贖ってくれた。・・・答えてくれ
ルーク・・・」

ヴィクの呟きに応えるかのように、その星はカランツと鳴いた。

——ここは『星の泉』。

夢の墓場と呼ばれる場所だった。

眠り姫

彼女は遙か昔、『黄昏の果て^{たそがれのはて}』の時代から眠り続けてきた。

——終わらない夢を見続けてきた。

そこは世界の中心——大樹が鎮座する森。

彼女——ルークレイションは大樹を寢床にして眠りについていた。

ルークレイションの眠りは罪の証。

ルークレイションは聖なる森で罪を洗い流していた。

彼女が目覚めたとき・・・それは彼女の罪が洗われたということ。

——そして、その時はやってきたのだ。

少しずつ、夢に囚われていた意識が現実へと戻り始めたのだ。

かたく閉ざされていた瞼がピクリとふるえ、ゆっくりと瞼が開いていく。

若草色の瞳が瞬く。

——その瞬間、一筋の光柱が空に走った。

まるで、女神の目覚めを世界へと伝えるかのように。

夜の帳へと光の矢が放たれ、そして消えた。

それと同時に、目覚めかけていたルークレイションの意識は再び眠りの海へと沈み、彼女の瞼も閉ざされた。

けれど、彼女はたしかに目覚めたのだった。

——彼女——時の女神の完全たる目覚めのときは近い・・・

眠り姫（後書き）

次回、ようやくメインキャラが出てきます。

夢

——何だろう？

声が聞こえる。

——ああ、違う。…これは夢だ。幼いころから何度も見る夢。それなのに、どうしてか夢から醒めると覚えていない夢。

ただ、夢を見たことだけ覚えていた。でも、その夢を見ると、いつもの夢だと理解できた。

今夜もまた、その夢を見ているのだ。

その夢は霞がかかっているみたいに映像がはつきりしていない。

でも、心に語りかける、その声ははつきりしていて、それでいてどこか懐かしい。

この声は誰だろう。

この声を私は知っている。

遠い、遠い昔から知っている気がする。

声はどこか哀しげで、切なくて…

——夢から醒めると、いつも瞼から涙が溢れていた。

不思議な感覚に意識を揺さぶられ、少女は目を醒ました。
いつもの夢を見たのだろう、目尻には薄く涙が浮かんでいた。少女は指先で涙をふき取った。

「——夢…ここしばらく見ていなかったのに」

少女は呟いて、ベットから出て窓の前に立つ。

初夏の涼しげな風が頬を撫でていく。

空はまだ、濃い闇に包まれている。朔さくの夜なので月はなく、かわつて星がいつもより強く光り輝いていた。

「今、何刻ぐらいだろう」

夜の風を受けながら、外を眺めていた時、ふと、全ての音が掻き消された。否、全ての音が止まった。
夜の静寂が世界を包んだ。

「——何…？」

少女は怯えた声で呟く。

見上げた空から、世界から今まで満ちていた音が消え失せた。
その事実混乱している少女の目の前で『それ』は起きた。

——夜空に光の矢が走ったのだ。

その光は一瞬の出来事だった。しかし、その光は少女の目に強く焼きついた。

「今の光は何？」

少女は呆然と呟く。

——あの光は何だろう？

そのことが頭から離れない。

——この心のざわめきは何だろう？

突然、『夢』から目が醒めたのだ。ただの夢ではない。幼いころから見る、覚えていない『夢』。

そして、その直後に光が走った。

これはただの偶然だろうか？

——呼んでる？でも、誰が…？

不思議な気持ちだが、今の自分を支配している。

——懐かしい…

そう、思ったのだ。その光は温かく、哀しげで、それでいて懐かしい。どうしてかは分からない。

でも、確かに心はそう告げている。

ふと、頬を伝うものがあつた。

手で触れてみたら、それは涙だった。

「——涙…どうして…」

少女は窓の外を見つめた。

外は既に元の落ち着きを取り戻している。

「あの光、あっちの方向だったよね…」

少女は光が走った方角を見つめながら、小さく呟いた。そして微笑む。

「——行こう。あそこにある何かを確かめに」

だって、そうしなくちゃいけない気がするから——だから行くんだ。
心がそう告げているから。

——行かなくちゃ。

あそこは私が行くべき場所だから——

テルカの森

「なんつーかさ、何をどうしたら、こんなことになるんだろうな」

彼は表情に少し落胆の色を覗かせて言った。

その独り言も問いかけとも見受けられる言葉に、彼の前を歩く少年が振り返って答えた。

「ジオンが道に迷ったからだよね？」

少年は不機嫌丸出しの笑顔を浮かべていた。

現在、二人がいるのは『テルカの森』と呼ばれる森の中。

辺りは、すっかり真夜中である。加えて、今夜は月のない朔の夜^{さく}。いつもより、深い暗闇が広がっていた。

本来、夜の森は出歩くべきではない。方向感覚が狂うだけでなく、夜行性の獣に遭遇^{そくぐう}してしまうかもしれない。

それでも、少年は道標があるかのように進んでいく。真つ暗な闇の中、少年の持つカンテラの灯りだけが森の中を照らしていた。

「本当だったら、夕刻には町にたどり着くはずだったのに……」

少年は深いため息をつく。

彼は、ジオンを先に歩かせたことを後悔した。ジオンは救いようがないくらい、重度の方向音痴だった。

少年の様子に無性に腹が立って、ジオンは文句を垂れる。

「うるさいっての、ノイ。今回は地図が悪いんだ。そもそも、迷ったんだ。今更どうこう言ってもしかたないだろ」

「ジオン……悪いのは地図をしっかり見ないジオンであって、地図の

せいじゃないから。」

ノイは振り返って、呆れた様子で言った。
そして、またすぐに歩き出した。ただ、前を見据えて。

「——ジオン。僕らは目的を持って旅していることを忘れないでよ。…あの人を探すんでしょ？」

「——そうだな」

ジオンは探し続けている人物の姿を思い浮かべた。
最後にあったのはいつだっただろう。今では、もう思い出せない。
そのぐらい、過去のこと。
けれど、彼女を忘れることはなかった。
その面影を今でも鮮明に覚えている。

——だけれど、彼女はもうどこにもいない。

『彼女』という存在は消えてしまったが、あらたな『命』としてどこかにいるはずなのだ。

——きっと、出会えば分かるはずだと信じて旅を続けてきた。
この旅の終わりはいつ訪れるのだろうか？

「森の出口に出たみたいだ」

物思いに沈んでいたら、急にノイに声をかけられる。

「——あ？ああ、何とか出られてよかったな」

「うん。よかったけど、どうかした？」

「いや、なんでもない。とりあえず、早く町に行こう。っても宿はもう閉まっているけどな」

「そうだね」

『——ノイ……』

突然、声をかけられて、ノイは辺りを見渡す。ジオンではなく女の子の声だった。

「ああ、どうしたの？ルフィン？」

ノイは背負ったカバンを見た。カバンの上のところに小さい光が浮かんでいた。

光が消えると、そこには妖精——ルフィンがカバンに座るようにして、ノイを見上げていた。

ルフィンは不安げな表情を浮かべ、

「ねえ、ノイ。空気が震えてる。なんだか変だよ」

声には怯えの色が見える。

その言葉にジオンが素早く空を見上げる。つられるようにしてノイも空を見た。

「——音が消えた…？」

ジオンが掠れた声で呟く。

一瞬のうちに世界から音が消えた。真の静寂が辺りを包む。

「いったい何が？」

その瞬間、空に向かって光が走った。ジオンはその光に目を奪われる。

——心が震える。まさか——

そうしているうちに、光は消え、音が戻った。

「——今の光…何だろう？ねえ、ジオン？」

ノイが呆然とした様子で声をかける。

「ノイ。地図を見せてくれ」

「地図を？ああ、はい」

渡された地図を広げ、自分たちが今いる場所と光の方向を確認する。光が走った方向を辿っていく。

そして、ある場所にぶつかった。

——世界の中心、大樹が鎮座する聖なる森。

その事実にはジオンは無意識に手を止める。もう一度、確認したが間違いなかった。

「——ルークレイションの目覚めが近いのか」

ジオンは小さく呟く。その呟きにノイは目を丸くして、

「——ルークレイション？たしか…時の女神のことだよね？その人が起きるってことは『罪』が消えたってこと？」

「そうだな。——そうか、ついに…」

ジオンは小さく微笑んだ。その笑みは優しい。ノイもその笑みを見てつられて笑った。

「どうせだし、行ってみる？」

「は？」

「だから、僕らの旅は目的地が決まっているわけでもないんだし、行ってみてもいいんじゃない？」

ジオンはしばらく考え込んだ。そして一言、

「——行く」

運命は交差する。

それぞれがもつ『運命』に導かれて。

人は長い旅路の途中に出会い、そして別れる。
それを永遠に繰り返す。

それは『運命』が起こす力。

足搔いても、覆すことは叶わない。

——運命は決して揺るがないものなのだから。

——揺るがしてはならないものなのだから。

力をもって、運命に干渉することは即ち、禁忌を犯すこと。

それなのに、なぜ人は罪を犯すのだろう？
なぜひとは足搔くのだろう？

分からない。

——分からないこと、それを知るためにはどうしたらいいの
だろう？

同じ人に生まれれば、何か分かるだろうか？

——そう、いつか…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7871p/>

failure fable ~ 目覚めの歌 ~

2011年2月20日11時21分発行